

Title	編集後記
Sub Title	
Author	西岡, 啓二(Nishioka, Keiji)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014
Jtitle	Keio SFC journal Vol.14, No.1 (2014.) ,p.269- 269
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 SFCが拓く知の方法論
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1401-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記

副編集長として私の思いを表明します。まずお手に取られてお気づきのように、今号より体裁がすこしコンパクトで手軽に読める学術論文集となりました。表紙も可愛らしく親しみのもてるものになったと思います。SFCの今が写真に表現されています。

今号の特集で眼目としたことは、いろいろな分野で新しい研究手法が実践されている、その説明と部分的にSFCで行われている実践例を紹介することです。特に、コミュニケーションを基礎とする研究手法がそのターゲットです。ひとの思いを如実に記述することの難しさが、研究方法の構築に反映しています。コミュニケーションにおいて聞き手のバイアスをどのように修正することができるのか、これはどのような分野でも焦眉の課題でありましょう。

秋山論文では複雑介入と混合研究法に基づいて、公衆衛生やヘルスサービスなどの実態把握の事例が述べられ、戈木クレイグヒル論文では、grounded theory approachが説明されます。私的に申し上げますと、他者との思いの交流は自らの思いと他者のものとの葛藤と判断の歴史です。これは苦痛を伴いますが、意思の疎通を感じた時には他者との葛藤は例えようのない喜びに転じます。研究者の喜びとはそのようなものなのでしょう。

倉林氏、水野氏の論文ではデジタルでそれを体感できることを主張しているようですが(偏見、私の思いを優先しています)、制限を大きく感じます。認識や感得にパターンの発想は基本でしょう。その点で井庭論文は有益かもしれません。特に日本人はパターンが大好きのようです。

私はデカルトが好きですので、奥田論文はおもしろい。イスラームを研究手法として認識することを主張するとは、これははじめての経験です。数学者として言わせれば、イスラーム社会は数学史のなかでも特異な存在です。彼らの寄与はもっと賞賛されてしかるべきだと思います。詳しくは関連論文を読んでください(文化史としては、結構あります)。とまれ、『KEIO SFC JOURNAL』に掲載された記事は研究の出発点として位置づけてもよいかもしれません。

自由論題論文に関しては多くは述べません。著者たちは素晴らしい感性で既成の研究に立ち向かっています。もし、読者のみなさんが彼らの主張にOKと思うのなら、彼らと共に自ら新しい歩みをなされることを期待します。

KEIO SFC JOURNAL 副編集長 西岡 啓二